

平成21年度(2009 年度)

幼小中一貫

キャリア教育に関する研究

～幼小中連携のキャリア教育プログラムづくり～

校園で取り組んでいる平素の取り組みを幼小中の発達段階に沿った計画性・継続性のあるキャリア教育の視点で見直し、中学校区で育てる子ども像の共通認識に基づいた幼小中連携のキャリア教育プログラムの作成を主な研究テーマとして研究を行った。

<研究員>

竹田 幸子	箕面市立かやの幼稚園	大森 奈都美	箕面市立中小学校
松本 美代子	箕面市立箕面小学校	小林 ひとみ	箕面市立豊川南小学校
黒杭 勝代	箕面市立萱野小学校	村上 裕子	箕面市立萱野北小学校
飯村 嘉彦	箕面市立北小学校	佐々木 俊彰	箕面市立止々呂美の森学園
宇治 記子	箕面市立南小学校	東原 正博	箕面市立第一中学校
駒井 安子	箕面市立西小学校	金城 忠	箕面市立第二中学校
藤井 陸平	箕面市立東小学校	中村 紀子	箕面市立第三中学校
灰掛 典子	箕面市立西南小学校	長瀬 文弘	箕面市立第四中学校
上野 詩織	箕面市立萱野東小学校	棟方 靖	箕面市立第五中学校
河村 朝子	箕面市立豊川北小学校	岡 一夫	箕面市立第六中学校
山本 歩美	箕面市立豊川北小学校		

<スーパーバイザー>

三川 俊樹 追手門学院大学 教授

I 研究テーマの設定について

現代の若者のこころの特徴として、①自己存在のゆらぎ、②人間関係のゆらぎ、③将来展望のゆらぎが挙げられる。その結果、自己存在（自尊心）、人間関係（信頼感）、将来展望（効力感）が感じられず、生きる力の低下につながっている。この課題に対しては、発達段階に沿った計画性・継続性のあるキャリア発達を支援するプログラムが有効であると考えられる。

本研究では、校園で取り組んでいる平素の取り組みを幼小中の発達段階に沿った計画性・継続性のあるキャリア教育の視点で見直し、中学校区で育てる子ども像の共通認識に基づいた幼小中連携のプログラムづくりを研究テーマに設定し取り組んだ。

II 研究実績

8月5日 夏季研修「キャリア教育での幼小中連携研修」（兼：研究部会）
（講師） 三川 俊樹（追手門学院大学 教授）

9月11日 研究部会「キャリア教育プログラムについて」
（講師） 三川 俊樹

2学期 各校園で、作成したキャリア教育プログラムの実践

1月6日 研究部会「2学期に実践したキャリア教育プログラムの交流」
（講師） 三川 俊樹

3学期 各校園で、作成したキャリア教育プログラムの実践

3月8日 研究部会「3学期に実践したキャリア教育プログラムの交流と研究のまとめ」
（講師） 三川 俊樹

3月下旬 研究紀要にまとめ

III 研究内容

○各校園のキャリア教育プログラム

IV 研究のまとめ

1年間のまとめとして、三川教授より幼小中一貫キャリア教育について、次のような提言をいただいた。

キャリア教育の理解とキャリア教育の推進にあたって

ーキャリアカウンセリングの活用と「自己有用感」の育成

追手門学院大学教授 三川 俊樹

1 キャリア教育とは何か

キャリア教育は、社会的・職業的自立に向けて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義されるが、児童生徒のキャリア発達に沿った系統性、すなわちキャリア発達段階に応じた計画的・継続的なカリキュラム・プログラムの展開を強調し、さらに児童生徒一人一人に対する個別の援助としてのキャリアカウンセリング、すなわち適切なコミュニケーションによるキャリア発達の支援を重視している。

すなわち、キャリア教育とは、「それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力」の発達を支援することを意味しており、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4能力領域・8能力などと例示されるキャリア発達の支援であり、社会的自立に向けた「生きる力」の育成であるといえる。

また、児童生徒一人一人のキャリア発達の支援として重視されるのが、個別の援助としてのキャリアカウンセリングである。文部科学省（2004）の『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書ー児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために』（p.29）では、「学校におけるキャリアカウンセリングは、子どもたち一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別またはグループ別に行う指導援助である」とされ、「キャリア発達を支援するためには、個別の指導・援助を適切に行うことが大切であり、特に、中学校、高等学校の段階では、一人一人に対するきめ細かな指導・援助を行うキャリアカウンセリングの充実は極めて重要である」として、キャリア教育においてキャリア発達を支援する個別の指導・援助としてのキャリアカウンセリングの意義が強調されている。

2 キャリア教育と進路指導との関係

では、これまで行われてきた進路指導とは何か。「進路指導とは、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて、生徒が自ら、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、更

にその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が組織的、継続的に指導・援助する過程をいう」(文部省 昭和36年 『中学校進路指導の手引き—学級担任編』)に定義されたのをはじめとして、「進路指導は、生徒の一人一人が、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の組織的、継続的な指導・援助の過程と言える」(文部省 昭和50年 『中学校・高等学校進路指導の手引き—高等学校ホームルーム担任編』)とされたのを受けて、①生徒理解・自己理解に関する活動、②進路情報資料の収集と活用に関する活動、③啓発的経験(体験等)に関する活動、④進路相談に関する活動、⑤就職・進学などへの指導・援助に関する活動、⑥追指導に関する活動の6領域から構成される組織的・継続的な取り組みであるとされてきた。

また、日本キャリア教育学会の前身である「日本進路指導学会」は、1987年に進路指導の定義を提案し、「進路指導は、個人が生涯にわたる職業生活の各段階・各場面において、自己と職業の世界への知見を広め、進路に関する発達課題を主体的に達成する能力、態度等を養い、それによって、個人・社会の双方にとって最も望ましいキャリアの形成と職業的自己実現を図ることができるよう、教育的・社会的機関ならびに産業における専門的立場の援助者が体系的、継続的に指導援助する過程である」(総合的定義)としたほか、「学校における進路指導は、在学青少年が自ら、学校教育の各段階における自己と進路に関する探索的・体験的諸活動を通じて、自己の生き方と職業の世界への知見を広め、進路に関する発達課題に主体的に取り組む能力、態度等を養い、それによって、自己の人生設計のもとに、進路を選択・実現し、さらに卒業後のキャリアにおいて、自己実現を図ることができるよう、教師が学校の教育活動全体を通して、体系的、計画的、継続的に指導援助する過程である」(学校教育における定義)として、生涯発達の観点から、キャリア形成と自己実現を目標とし、発達段階に沿って進路に関する発達課題を主体的に達成する能力や態度の育成を強調している。

さらに、平成11年の「中央教育審議会答申」でも、「進路指導とは、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力や態度を育てる教育である」として、主体的な進路選択の能力や態度の育成という観点が強調されるようになった。

このような進路指導とキャリア教育はどのような共通点を持ち、どのような点を異にしているのか。その異同や両者の関係については、文部科学省(2004)『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために』の記述を引用しながら検討することにした。

3 進路指導とキャリア教育—キャリア発達を促す個別支援について

進路指導の理念に反して、これまでの進路指導の取り組みは、そのあるべき姿で展開されてきたとは言いがたい。特に、一人一人のキャリア発達を組織的・体系的に支援するといった意識や、指導計画における各活動の関連性や系統性が希薄であるために、子どもたちの能力・態度の育成に十分結びついていなかったばかりか、ともすれば「進路決定の指導」に重点が置かれ、志望先の選択・決定等にかかる「出口指導」や、生徒の適性や進路と職業・職種との適合を主眼とした進学指導・就職指導

が中心となりがちであった。

また、職業教育も進路指導とともにキャリア教育の中核をなすものであるが、従来の職業教育の取組においては、専門的な知識・技能を習得させることに重点が置かれ、キャリア発達を支援する視点が不十分であった。したがって、職業教育においては、キャリア発達を支援するというキャリア教育の視点に立って、子どもたちが働くことの意義や専門的な知識・技能を習得することの意義を理解し、将来の職業を自らの意志と責任で選択し、専門的な知識・技能の習得に意欲的に取り組むことができるようにする指導・援助の充実が必要である（文部科学省 2004 同報告書 p.14より修正して引用）とされる。

進路指導が、生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持ち、自らの意志と責任で進路を選択決定する能力・態度を身に付けることができるよう指導・援助することであるという定義に立つ限り、進路指導の概念はキャリア教育の概念との間に大きな差異はなく、これまでの進路指導の取組みはキャリア教育の中核をなすものであるといえる。

一方、キャリア教育においては、キャリア発達を促す指導と進路決定のための指導とが調和をとって系統的に展開することが求められ、将来において社会人・職業人として自立し、時代の変化にも力強くかつ柔軟に対応していけるよう、規範意識やコミュニケーション能力など、幅広い能力の形成を支援することが目指されている。

さらに、キャリア教育の展開の中では、職場体験やインターンシップ、ボランティア活動などのさまざまな体験活動が実施されるようになってきているが、それを子どもたち一人一人のキャリア発達に結びつけていく指導・援助についてはまだ不十分であり、個人を対象としたキャリア発達の援助としてのキャリアカウンセリングについても十分に実施されているとは言えないのが実情である。

実は、これまでの進路指導においても、その6領域の1つには「進路相談」が組み込まれており、吉田（1996）が「わが国においても、キャリア・カウンセリングが大切であるという理解はすでになされているが、実際の指導となると進路指導の方に重点が置かれて、キャリア・カウンセリングは必ずしも十分になされているとはいえない状況にある」と指摘し、「進路指導の諸活動は、それぞれ別々に行うのではなく、全体として有機的に統合された活動でなくてはならず、また、その中心的な役割を担う活動がキャリア・カウンセリングなのである」と述べているが、キャリア教育は究極的には個のキャリア発達を目指すものであることを踏まえれば、個別のキャリア発達の支援としてのキャリアカウンセリングがますます強調されなければならないであろう。

4 キャリア教育—適応への指導・援助を重視した取り組み

もう一つのキャリア教育の特徴は、個人の適性と職業や進路先との適合とともに、将来自立した社会人となるために不可欠な、社会や集団への適応にかかる指導を重視するという点である。

これまでの進路指導が強調してきたように、個人の能力や適性と職業や進路先との適合の視点は重要ではあるが、子どもたちの生活や意識が大きく変化する中で、子どもたちが社会人・職業人として自立し、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化、社会の変化に対応していく資質や能力を身につけるための指導、すなわち「適応にかかる指導」がますます重要になっている。

生徒一人一人の能力や適性と進路や職業・職種との適合を主眼とした進路指導では、適応にかかる指導はそれほど重視されてこなかったといえるが、キャリア教育においては「生きる力」の育成の観点から、豊かな人間性や社会性、学ぶことや働くことへの関心や意欲、進んで課題を見つけ解決して

いく力とともに、集団生活に必要な規範意識やマナー、人間関係を築く力やコミュニケーション能力など、幅広い能力の発達を支援していくことを、これまで以上に重視していく必要があるとするのである（文部科学省 2004 同報告書 p.16より修正して引用）。

このような観点を踏まえ、学校における教育活動全体がキャリア発達への支援という視点を明確にし、個別のキャリア発達支援（キャリアカウンセリング）という観点と、適応への指導・援助という観点を意識して展開されるようになれば、これまでの進路指導に比べ、より広範な活動がキャリア教育の取り組みとして展開できるようになったといえる。

5 キャリア教育－「自己有用感」の育成をめざして

また、キャリア教育の中では、「自己有用感」を育成することが重要になると思われる。

滝（2005）は、「自分がしたことを感謝されてうれしかった」「自分は頼りにされている」「自分も誰かの役に立っている」「みんなから認められている」など、他者と交流することで得られる感情を「自己有用感」と呼んでいるが、「自己有用感」とは「他者の存在を前提として自分の存在価値を感じることで、誰かの役に立てたという成就感や誰かから必要とされているという満足感」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2004、p.112）と定義される。

「自己有用感」に似た言葉には、自己肯定感、自己存在感、自尊感情などがあるが、「自尊感情」の原語のself-esteem は「自尊心」とも訳されるように、自分の自分に対する評価に過ぎないということから、自分本位ではなく他者が存在して成り立つ感情である点を強調して「自己有用感」の語を用いるという（滝、2005）。

滝（2005）は、「自己有用感」は少し前までは家族や近隣の中で自然に身につけてきたものであり、兄弟数・家族数が多く、近隣の子どもの数が多かった時代には、お手伝いや遊びの中で、子どもにも年齢に応じた役割が割り振られ、そうした役割を果たすことを通して「自己有用感」を獲得し、社会の一員であることを自覚し、それが昔の子どもの「規範意識」を支えていたという。しかし、今の時代にはそのような体験が極めて稀になり、子どもは「してもらおう」ばかりで、「させられる」体験や「してあげる」体験に乏しく、さらに形式的な平等主義がいきなり、年長者も年少者も同じようにしか扱われなくなっていると指摘する（滝、2005）。

このように「人の役に立てたという成就感や人から必要とされているという満足感」という「自己有用感」は、キャリア教育で育成しようとしている4領域・8能力の発達に関係しており、とくに、自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく「自他の理解能力」や、多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく「コミュニケーション能力」のほか、生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく「役割把握・認識能力」の発達と大きくかかわっていることが理解できる。

6 「自己有用感」を育む体験的活動

一方、「自己有用感」は、キャリア教育の推進に際してさまざまな所で強調されてきた。

文部科学省（2004）『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書－児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために』では、「キャリア教育の基本方向と推進方策」の中に、「早期からの自立意識の涵養と豊かな人間性の育成」として「キャリア教育を進めるにあたっては、

子どもたちが他者の思いや苦勞，誇りや心の痛みなどを自らのものにするによって，豊かな人間性を培うとともに，自分自身への自信や有用感を持つことができるようにすることが大切である。また，そうしたことを通して，勤勞の尊さ，それぞれの職業・仕事の大切さや社会的役割等の理解を深めていくことができるようにすることが大切である」とされている (p. 20-21.，下線は筆者)。

また、「体験活動等の意義」においても、「体験活動等には，職業や仕事の世界についての具体的・現実的理解の促進，勤勞観，職業観の形成，自己の可能性や適性の理解，自己有用感等の獲得，学ぶことの意義の理解と学習意欲の向上等，様々な教育効果が期待され」 (p. 25.，下線は筆者) ていることから，職場体験やインターンシップの他，企業見学や社会人・職業人講話・インタビュー，大学等上級学校等の見学，聴講及び大学等からの出前授業，図書館や美術館，博物館での調査研究活動，福祉施設や幼稚園，保育所等でのボランティア体験等，体験活動の具体例を幅広く示しているほか，実施したほとんどの学校からこのような面での大きな成果が報告されていると述べられているように，キャリア教育によって「自己有用感」を高める取り組みの一つとして体験活動を重視していることがわかる。

この点について，文部科学省 (2006) 『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤勞観，職業観を育てるために』では，次のように述べられている。

まず，小学校段階におけるキャリア教育は，6年間を通して計画的・継続的に推進されるものであるが，小学校では低学年，中学年，高学年と成長が著しく，社会的自立に向けての基礎を形成する重要な時期であるため，児童一人一人のキャリア発達にに応じて，人，社会，自然，文化とかがかわる体験活動を，身近なところから徐々に広げ，ていねいに設定していくことが大切である (p. 30. より引用，一部修正)。小学校段階では，遊びや家での手伝い，学校での係活動，清掃活動，勤勞生産的な活動や地域での活動等の中において，自分の役割を果たそうとする意欲や態度を育てていくことが重要であり，日常的な活動の中で担うさまざまな「役割」遂行の経験を積み重ねながら「自己の生き方」を考えることができるようにしていくことが望まれる (p. 32. より引用，一部修正) が，これが「自己有用感」の育成に大きく寄与することになる。

また，表に示したように，中学校段階でも「肯定的自己理解」と「自己有用感」の獲得を目標の1つとしてあげていることから考えると，「自己有用感」の基礎は小学校段階において育む必要があるといえる。さらに，表の「児童生徒の感想から」に記載されたような子どもの気づきや思いを，どのように「自己有用感」として実感させていくかに，さらに配慮と工夫が必要となる。

したがって，教師は児童・生徒一人一人の理解に努め，人間関係を築く中でキャリア発達の個人差を認識し，個々の児童・生徒に応じた援助を行うことが必要であり，キャリアカウンセリングを適切に行っていかなければならない。ここでいうキャリアカウンセリングは，子どものキャリア発達を支援するための個別の援助のことであるが，児童・生徒のさまざまな体験活動における思いや気づきを，受容的態度と共感的理解を基礎に，「観る・聴く・受け止める」というコミュニケーションを積極的に行いつつ，子どものキャリア発達に応じた「自己有用感」を高めるような配慮を行わなければならない。すなわち，「自分が人の役に立っている」「自分は人から頼りにされている」「自分がしたことを感謝されてうれしかった」など，人の役に立てたという成就感や人から必要とされているという満足感を感じることができるように，さまざまな体験活動の事後指導において，適切なコミュニケーションをていねいに図っていく必要があるといえよう。

教職員や保護者，地域の大人を含めて，キャリア教育の推進に携わる関係者は，小学校段階はキャ

リア発達の基盤形成の大切な時期であることを意識して、「自己有用感」が実感できるような体験活動を身近なところから設定し、遊びや家での手伝い、学校での係活動、清掃活動、勤労生産的な活動や地域でのさまざまな活動を通して、一人一人の子どもに寄り添ってその理解を深め、さらにキャリアアカウンセリングという適切なコミュニケーションによって、自分が人の役に立てたという成就感や、自分は人から必要とされているという満足感をさらに高めることができるような取り組みを継続していくことが期待される。

表 キャリア発達と体験的活動の関連(例)

小学校	中学校	高等学校
〈キャリア発達段階〉		
進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 興味・関心等に基づく勤労観、職業観の形成 進路計画の立案と暫定的選択 生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己受容 選択基準としての勤労観、職業観の確立 将来設計の立案と社会的移行の準備 進路の現実吟味と試行的参加
体験的活動(例)		
<ul style="list-style-type: none"> 地域の探検 家族や身近な人の仕事調べ 見学 インタビュー 商店街での職場見学 中学校の体験入学 	<ul style="list-style-type: none"> 家族や身近な人の職業聞き取り調査 連続した5日間の職場体験 子ども参観日(家族や身近な人の職場へ) 職場の人と行動を共にするジョブシャドウイング 上級学校の体験入学 	<ul style="list-style-type: none"> インターンシップ(事業所、大学、行政、研究所等における就業体験) 学校での学びと職場実習を組み合わせて行うデュアルシステム 上級学校の体験授業 企業訪問・見学
児童生徒の感想から		
<ul style="list-style-type: none"> いっぱいおもしろいものを見て楽しかった。 いつも私たちがまもってくれてありがとう。 大きくなったら、私も看護師さんになりたいな。 お店で働いている人は、見ているよりずっとたいへんだな。 いろいろな仕事を見て、夢がまた増えた。 うちのお父さん、お母さんの仕事もたいへんだなと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> 仕事の厳しさや楽しさを知り、働くことの大切さを感じた。 親やまわりの大人たちがとてもがんばって働いていることに感心した。 コミュニケーションの大切さを知った。 学校での勉強が大事だということがよくわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来なりたいと思っていた仕事だが、自分に向いていないと実感した。 学び続けることの大切さを知り、これからの進路決定に役立った。 企業努力の大切さと現実の厳しさを実感した。 部下に指示をだす場面をみて、部署の人間関係の大切さを感じた。

引用文献

- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2004 「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」－「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－
- 文部省 1961 中学校進路指導の手引き－学級担任編（昭和36年）
- 文部省 1975 中学校・高等学校進路指導の手引き－高等学校ホームルーム担任編（昭和50年）
- 滝 充 2005 規範意識の形成と教師の指導力 CS研レポート, 55, 10-13.
- 吉田辰雄 1996 キャリア・カウンセリングの必要性 日本進路指導学会（編）キャリア・カウンセリング－その基礎と技法、実際 実務教育出版 Pp. 4-7.

IV 最後に

キャリア教育を箕面市で教育研究員として取り組むようになったのは、今年度が最初である。まず、今年度は、キャリア教育を理解するところからスタートした。そして、2学期・3学期に各研究員の方々にキャリア教育でおさえおくべきポイントをふまえて、授業において実践された。

キャリア教育研究の初年度として手探りであったが、次年度に向けての課題も見えてきた。

○職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例) - 職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成の視点から ※ 太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

領域	小 学 校			中 学 校			高 等 学 校		
	低 学 年	中 学 年	高 学 年	現 実 的 探 索 と 選 択 的 選 択 の 時 期	現 実 的 探 索 と 選 択 的 選 択 の 時 期	現 実 的 探 索 と 選 択 的 選 択 の 時 期			
職業的(進路)発達段階	<p>職業的(進路)発達段階(1〜高等学校段階)を発達段階としておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成から捉えたもの。</p>			<p>職業的(進路)発達段階(1〜高等学校段階)を発達段階としておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成から捉えたもの。</p>			<p>職業的(進路)発達段階(1〜高等学校段階)を発達段階としておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成から捉えたもの。</p>		
職業的(進路)発達にかかわる諸能力	<p>職業的(進路)発達にかかわる諸能力</p>			<p>職業的(進路)発達にかかわる諸能力</p>			<p>職業的(進路)発達にかかわる諸能力</p>		
人間関係形成能力	<p>【他者の理解能力】 自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>	<p>【自己の理解能力】 自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>	<p>【他者の理解能力】 自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>	<p>自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>	<p>自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>	<p>自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高め、自己の理解能力を高め、他者の理解能力を高める。</p>			
情報活用能力	<p>【情報活用能力】 情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>	<p>【情報活用能力】 情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>	<p>【情報活用能力】 情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>	<p>情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>	<p>情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>	<p>情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高め、情報の活用能力を高める。</p>			
将来設計能力	<p>【将来設計能力】 将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>	<p>【将来設計能力】 将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>	<p>【将来設計能力】 将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>	<p>将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>	<p>将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>	<p>将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高め、将来設計能力を高める。</p>			
意思決定能力	<p>【意思決定能力】 意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>	<p>【意思決定能力】 意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>	<p>【意思決定能力】 意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>	<p>意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>	<p>意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>	<p>意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高め、意思決定能力を高める。</p>			